

菅谷規矩雄のこと

長野 隆

学生時代、友人に高木香世子という才女がいて、いつだったか、彼女から突然『詩的リズム』を差し出されたことがある。とても面白いので、読んでみてはどうか、という促し

であった。彼女の卒論は芥川龍之介で修論は宮沢賢治だから、たぶん大学院に入った頃だと思ふ。ぼくは、まだ読んでなかった。読んだのは(彼女の促しにも関わらず)ずっとあ

とになってからだ。ただ、名前には強い記憶があり、即座に「あの人が」と、『ユリイカ』（「特集」萩原朔太郎「昭50・7」）の中の一篇——「律動と音韻」——を思い出した。萩原研究者として有名な某批評家（の説）を容赦なく難じたもので、論法には「ささかの「緩み」も見えなかった（という印象を消し去れない）。」なにか、かたちにならない敵意のようなものが行間に滲んでいて、その理由がよく解らなかつた。というより、解ることを躊躇らつていたように思う。

その「解ることを躊躇らつていた」頃から、吹き抜けるように十五年が過ぎ、いまはくは住み慣れた関西を遠く離れ、故郷とも全く反対側の北方の気圏の下で生活している。弘前に職を得てこのかた、専攻も中世から近代に立ち返り、早くも七年を経たのだ。ほくにとっては、「躊躇らい」など言っておられなくなつていた関西での生活から、何かを吹っ切つた。（取り返す？）ために走り通した七年だった。そしてその伴走者は、たいがい菅谷規矩雄の本だった——つまり菅谷規矩雄とは、いつもぼく（たち）の通か前方を、単独で疾走しつづけているにちがいない人物だったから。少なくとも、そう思い込むことによって、ぼくは支えられた。

「萩原朔太郎1914」は忘れられない。

盛られた内容はひろんのこと、個人誌「解体新書」発行をめぐる挿話に、思わず胸が熱くなるのおぼえた。彼みずから依つて立つ「場の孤立と、無言裡の「思想」の跳躍を牙のようにかぎして、ときに限界音域をさ迷つていようでもあつた。そのいかにも「いたたまれない」意志的な表現が、ぼくは好きだつた。

\*

菅谷さんの死は、なんとしても惜しまれる。「詩的リズム」以降一連の彼の関心は、いよいよ佳境に難所に入つていて、本命の「メロス」に向き直つていたからだ。つまり「うた」の節々旋律という無意味の意味に、真つ向から対峙していた。例によつて難解で直観的な断片の数々が誌面を埋めはじめたとき、ぼくはそう悟つた。どことなく苦しうだつたが、それが死の兆候だとは思えない。

詩人論は、彼の愉快だつたらうか——ともかく、彼のなかには高村光太郎への焦りにも似た執着があつて、吉本さんの「高村光太郎」が重くのし掛かつていたのは事実だ。中原中也や太宰治の問題も、すでにエスキースは出来上がつていたはずなのだ。

\*

菅谷さんとは三度会つたばかりだ。一度は東京で、「詩論」の同人たちや田村雅之氏らと。あとの二度は、ここで、弘前大学の学生

たちと一緒に。——いずれもそんな具合だから、ぼくは専ら話の聞き役で、それを通して生身の彼の孤独のひだに、僅かな感触を確かめてきたに過ぎない。それ以外はすべて電話だつた。死の二月ほど前にも、ちょうど赤坂憲雄さんが弘前に来ていて、話が菅谷さんのことに及び、夜遅く電話した。何を話したかよく覚えてないが、そのときは楽しい話だつた。「昔教えた女子学生たちのことを懐かしそうに話してましたよ」という赤坂さんの「菅谷談」に、なんとなく相槌を打つものがあつて、ダイヤルしたのを覚えてるから。——大学を捨てたことで（不覚にも）思い知らされた彼の最大の誤算は、学生を失つたことだつた。それは、本人も禁じて口にしなかつた、或る種の「喪失体験」にちがひなかつた。——ぼくは、それをこの弘前ではつきり目撃している。

いつだったか、どうしようもなくひどい状態で、知らず聞き役を菅谷さんに求め、電話して、話しながら嗚咽してしまつたことがある。恥ずかしい話だ。嗚咽して、どうにも止まらず、受話器を女房に預けてしまつた。彼はそのとき言ったそうだ——「……故郷のことばを忘れるんですよ。そんなときは何を言つてもだめだから、もう少しお酒を飲ませて、早く寝かした方がいい……」——（ぼく自身の）

ぐちの中身はさておき、このことばに溢れるものの大方は、そのまま、菅谷さん自身が無意識裡に耳を傾けていた「声」に思えて、今では口にすることばもないのである。

菅谷さん、やはりぼくは、あなたには何も

言えない。ぼくが何かを構えているからではなく、あなたに意志の姿勢が強すぎたから。叶うことなら、あなたを死に至らしめたお酒をもう一度酌み交わして、あなたのぐちを聞いてやりたかった。